

目次

1. 事務局より
2. 昨年度の編集責任者より
3. 新編集委員のプロファイル
4. 本年度の編集責任者より
5. 運営・企画担当より
6. 今後の例会案内
7. 各地の研究会だより
8. フランスの若手・中堅研究者紹介(2)
9. IT時代のコーパスづくり
10. フランス語学会と私
11. 編集後記

1. 事務局より

- ・事務局は引き続き慶應義塾大学に置かれています。

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学 来往舎内

日本フランス語学会事務局

sjlf-jimu@attマークhc.cc.keio.ac.jp

事務局へのご連絡は、郵便または電子メールでお願いいたします。電話、ファックスはお受けできませんのでご了承ください。

・新規加入、住所変更、退会の場合は事務局までご連絡ください。なお退会ご希望の場合は、その旨ご連絡いただいた年度の会費もご納入いただくことになっておりますのでご了承ください。

・会費は日本フランス語フランス文学会の春期大会(5月末)の会場に設置される当会専用の受付で直接ご納入いただけます。それ以外の場合は、6月頃に郵便振替用紙を学会誌とともに送りいたしますので最寄りの郵便局でご納入ください。なお、会費の納入が2年遅れますと3年目からは学会誌の発送を停止させていただきます。郵便振替用紙のみ送付させていただきます。

・過去の会費をご納入いただいたにもかかわらず学会誌をお受け取りになっていない場合は、お手数ですが事務局までご連絡ください。複数年の会費を一度にまとめてお支払いいただいた場合に時折このような問題が生じます。なお、入会された年度以前のバックナンバーをご希望の場合はフランス図書(03-3346-0396)

までお問い合わせ下さい。事務局では販売しておりませんのでご了承下さい。

2. 昨年度の編集責任者より

この文面を書いているのは4月下旬で、『フランス語学研究』39号の三校の作業がまだのこっているのですが、編集委員、執筆者のみなさま、そして印刷所のかたがたのご協力をおもちまして、これまでのところすべてがスケジュールどおり、順調にすすんでおります。ありがとうございます。以下では、39号が無事に発刊できているものと仮定して、お話をさせていただきます。

印刷所の変更など

前号のニューズレターでの予告どおり、しめきりを一ヶ月早めることにより、査読をいっそう精緻化し、査読コメントの調整も十分にさせていただくとともに、査読結果の通知も早め、その後の掲載原稿の書きなおしや、共著の場合は著者間の調整にも、以前にくらべて時間を使っていただけになりました。また、文献の表記法も前年度の周知期間を経て、今回から新方式に準拠していただくことになりました。この変更も、順調に適用がすすんだものと思います。とくに執筆者のみなさまのご協力に感謝申し上げます。

さて、以上の変更は昨春から予定されていたことでしたが、その後、もうひとつのたいへん大きな変更にふみきることになりました。それは、(学会誌本冊の編集後記にも書きましたが)創刊以来つづけて利用してきた印刷所を、別のところに変えたことです。従来の印刷所と、それ以外にも複数の見積もりをとり、価格比較にもとづいてあらたな発注先をえらびました。従来の発注先は、フランス語の印刷にも定評のあるところでしたので、長年利用してきましたが、活版印刷の時代とはちがって、原稿をすべてデジタルデータで入稿している現在では、フランス語がふくまれているからといって、にわかには印刷所でのしごとが困難になるわけではありません。また、あらたな発注先も、すでにいくつかの大学の仏文科の紀要の印刷を手がけており、その精度も満足のものであったことから、編集委員会において変更を決定しました。

これにより、前号までにくらべて印刷費が半額未満に節減できる見こみとなりました。今後、あたらしい印刷所での印刷が軌道にのれば、学会の財政も改善し

てまいりますので、それをいかに会員のみなさまに還元するかが課題になります。その検討はすでに、このニューズレターが発行される5月下旬にひらかれる編集委員会でもはじまっている予定です。あたらしい企画としてどのようなものが可能か、どのようなものが望ましいか、議論をすすめてまいりたいと思いますので、会員のみなさまからも編集委員や事務局にご意見をおよせくださいますよう、お願いいたします。

投稿規定について

以前から問題になっていたことですが、投稿規定をまもっていない原稿が少なくありません。正直に申し上げますと、わたし自身も、細部の形式をいちいちチェックすることは生産的な仕事ではないので、これまであまり重視しておりませんでした。これは反省しなければならぬ点です。というのも、投稿規定をすべて遵守した原稿がそろってはじめて、公平な条件での審査が担保されるからです。たとえば、制限字数の上限を超過して書かれた原稿があるとすると、多く書くことによって意をつくすことができますし、よりひろい内容を扱うことができ、充実した論文であるということになるかもしれません。しかしそのような原稿を、窮屈な思いをしながらも制限字数をまもって書かれた原稿と同じ土俵のうえにのせて比較したのでは、どうしても不公平にならざるを得ません。そうした意味で、規定に関してはご投稿くださるかたがたも査読委員会も、おたがいに厳格なとらえかたをしたいと思います。

ただし一方で、現行の投稿規定が絶対的に最善ときままっているわけでもありません。それについては、今後考えてゆくべき点であると思いますので、規定についてもぜひ、編集委員や事務局にご意見をおよせください。

「論評」と「紹介」について

おなじ制限枚数で、「論評」と「紹介」というふたつのジャンルがあります。これらの相違について、質問が出されたことがありましたので、念のため従来からうけつがれてきている趣旨を再確認しておきたいと思います。「紹介」は、対象となる書物や論文の客観的な祖述や解説をおこなうもので、情報提供的な意味がある記事です。それに対して、「論評」は、客観的な紹介にとどまらず、評者の立場をも示し、評者がのぞましいと考える方向にコミットした議論をおこなう記事です。単なる *compte-rendu* ではなく、英米系の学術誌でいう *review-article* にあたるものという位置づけです。これらのジャンルの投稿にあたっては、この相違を意識したうえで執筆してくださいますよう、お願いいたします。

編集委員会について

今春の編集委員の交代についてご報告いたします。泉邦寿氏、大木充氏が辞任なさいました。おふたかたとも、長年にわたってフランス語学会にさまざまなかたたちでご尽力たまわりました。こころよりお礼申しあげます。あらたに、青木三郎氏、井口容子氏、中尾和美氏、長沼圭一氏が委員に就任されました。青木氏は以前も委員をつとめておられましたが、今回復帰してくださることとなりました。それ以外のかたがたには、はじめてくわわっていただくこととなります。どうぞよろしくお願いいたします。新委員の方々は本ニューズレターに自己紹介を書いておられますので、あわせてご覧ください。また、第40号の編集責任者は、木内良行氏がお引きうけくださることとなりました。

これまでをかえりみると、やはりわたしにとっては、意あって力不足の1年間でした。事務、書類作成・整理、校閲、会議の運営、そしてスケジュール管理などの仕事をすべて苦手とするわたしが、それにもかかわらず、なんとか編集責任者をつとめてまいりましたのは、ひとえに編集委員、執筆者、そして会員のみなさまのあたたかいお力ぞえのおかげです。個々にお名まえを出すことはひかえませんが、担当してみたらためて、この仕事がいかに多くのかたがたのご協力にささえられているかを、身にしみて感じました。こころよりお礼申しあげます。今後は、編集委員のひとりとして、そしていくつかの業務の担当者として、フランス語学会にかかわってゆくこととなりますが、なにとぞひきつづきよろしくご指導いただけますよう、この場をおかりしてお願い申しあげます。（渡邊 淳也）

3. 新編集委員のプロファイル

編集委員会の構成員は世代、地域、専門領域などのバランスを考えながら、毎年数名づつ交代することになっています。編集委員のリストは『フランス語学研究』の奥付に記されていますが、ここでは今年度あらたに編集委員に就任された青木三郎氏、井口容子氏、中尾和美氏、長沼圭一氏に簡単な自己紹介をお願いしました。

~~~~~

#### 青木三郎（筑波大学）

昨年は韓国の誠信女子大学で仏語学の講演をする機会に恵まれました。多くの仏語学研究者、学生と友情の輪を作ることができました。またチュニジアのスファックス大学でシンポジウムを開き、仏語研究者と交流を持ちました。今春はモロッコのハッサン2世大学、モハメッド5世大学、カディ・アヤド大学で言語学者と会議を持ちました。わずかな経験ですけれども、韓国では韓国語と日本語とフランス語が飛び交う場に

居合わせ、刺激的でした。チュニジアではアラビア語（フスハ、チュニジア方言）とフランス語、それに英語が混ざりあいます。モロッコでも同様でしたが、チュニジアよりもフランス語のプレゼンスが大きいように感じました。（英語ができない人が多い、ということです。）文法的には大して変わらないと思いますが、語彙のレベルではいろいろありそうです。またチュニジア方言、モロッコ方言にはフランス語がかなり混交しており、クレオール化しています。

私はフランス語学を通じて自分なりに学んだ研究方法（対象へのアプローチの仕方、データの分析、発見的手続き等）を基礎にして、世界の様々な場所で使われているフランス語の現場を研究していきたいと考えています。

井口容子（広島大学）

今年度から編集委員を務めることになりました。よろしく願いいたします。

フランス語をはじめたのは九州大学の学生のときです。外国語としては英語しか知らなかったそれまでには気付かなかった「ことば」のおもしろさを感じたのが、この世界に入ったきっかけだったように思います。

大学院生のとき、はじめて語学会の例会で発表しました。当時の会場だった上智大学にはやく着きすぎてしまい、どきどきしながら廊下で待っていたのが、とてもなつかしく思い出されます。発表後の質疑応答の際、先生方からいただいた御意見・御指摘はとても刺激的で興味深く、また例会後に暖かい雰囲気の中で色々なことを話していただけたのが、とてもうれしく感じられたことをおぼえています。

ことばについて考えるのは本当に楽しいことで、年々、新しい楽しさに出会えるような気がします。今、特に興味をもっているのは、代名動詞、動詞の自他、非対格性などを含めた、広い意味における「ヴォイス」の問題、与格の構文などです。言語類型論的視点を取り入れながら、これらの構文を考察しています。

勤務先の広島大学総合科学部では、「言語文化科学プログラム」を担当しているのですが、このプログラムにはフランス語を主として勉強している学生もいます。卒論のテーマとしては文化論的なものを選ぶ人が多いのですが、フランス語学の卒論を書く人もいて、学生と一緒にフランス語の構文について考えるのも、また楽しいことです。

中尾和美（東京外国語大学非常勤）

「フランス語研究なんかやっても…」これは、既に鬼籍に入られた言語学者のある先生から修士時代に酒の席で言われたことばです。無論、研究に値しない言語は存在しません、たとえ多くの話者や研究者に恵ま

れ、文法がほぼ記述済みの言語であったとしても。しかしながら、斯く言う私も、辞書や文法が既にあるような言語を研究してもしょうがないと、学部時代は専攻のフランス語から離れ、極北やアフリカの言語にばかり気持ちが向いていました。が、結局どの言語もものにならず、その後、東京の辺境やフランスの田舎でOL生活を送り、一度は言語研究から離れたものの、言葉恋しさのあまりに再びこの世界に舞い戻ってきてしまい、今日に至っています。戻ってきてみると、辞書や文法が整備されたフランス語においてもやるべきことがまだ沢山あること、また辞書に書かれている事柄の半分も自分が知らなかったことを改めて実感しています。

言葉、とりわけ外国語を勉強していて楽しいと感じるのは、自分の母語ではありえないような構造に出くわして、経験の捉え方の多様性にハッとさせられる時です。また、定まったように見える構造の中に変化の兆しを認めるのもうれしい驚きです。型を逸脱しようとする動き、話者に意識されない秩序、そんなフランス語の様々な表情を観察し、伝えることができたと考えています。具体的には、名詞複合語、固有名詞、命名についてここ数年調べていますが、それ以外にも、タブー、ポライトネス、だじゃれ、表記のあそび等についても、暇にまかせて乱読しています。常に頭の中が混沌としているせいか、言葉を整然と理論化することよりも、理論化を拒む出鱈目な言葉のふるまいの方にむしろ魅惑されます。

七つの海ならぬ、七つの大学で文法、講読、仏作文、仏語学等を担当し、日々東京を東へ西へと奔走していますので、例会以外でもどこかでお目にかかることがあるかもしれません。身体、能力ともに小粒ですが、微力ながらも編集委員としてフランス語学会に貢献することができれば幸いです。

長沼圭一（筑波大学非常勤）

この度は編集委員にお迎えいただきたいへん恐縮です。正直なところ、私にとって編集委員会は雲の上の世界でしたので、まさかお誘いいただけるとは思ってもみませんでした。非力ではありますが、皆様の足を引っ張らぬよう、フランス語学のさらなる発展を目指して、全力を尽くしてまいりたいと思っております。どうかよろしく願いいたします。

私がフランス語を始めたきっかけは、月並ですがポピュラー音楽でした。高校生のとき、テレビのCMでブリジット・フォンテーヌの「ラジオのように」が流れて来た瞬間、鳥肌が立つのを感じました。それ以来、全く意味の分からないフランス語の歌を好んで聴くようになり、いつかこの未知の言語が話せるようになりたいと思っていました。

大学に入学したときは、思う存分フランス語が学べる環境になったことにたいへん満足していました。フランス映画にも興味を持つようになり、よく見に行っていました。しかしながら、気が多かつたせいで、フランス語以外にもいくつかの未知の言語に手を出してしまい、一つとしてまともなものにすることはできませんでした。

その後、単純にフランス語の勉強を続けたいという理由で大学院に進みましたが、大学院は私が想像していた以上に過酷な世界でした。そこは強い信念と才能を持った人たちであふれており、私はただ気後れするばかりでした。そして、右も左も分からないまま恐る恐る学会発表を拝聴させていただいたのですが、無学な私はそこで交わされる白熱した議論に圧倒され、戸惑いを感じずにはいられませんでした。それでも多くの方々に支えていただき、何とか自分なりにフランス語学の道を歩んで来ることができました。

今は非常勤講師としてフランス語を教えるようになりましたが、自分の能力の乏しさを思い知らされることが多々あり、初心を忘れず精進していかなければならないと日々自分に言い聞かせております。

#### 4. 本年度の編集責任者より

本年度は私、木内が編集責任者の役目を引き受けさせていただくことになりました。編集にあたりましては、従来の基本方針を維持しつつ、より豊かな内容を目指していきたいと思っています。『フランス語学研究』は敷居が高いという声もあるそうですが、学会誌である以上はその名に値するだけの基準は保たれるべきであって、私個人としては他の言語学関連の雑誌に比べて論文の選考基準が決して高すぎるとは考えておりません。確かに、歴史言語学や社会言語学等の論文はあまりなく、掲載論文の分野に偏りがあるように見えるかもしれませんが、これは英語学などとは違ってフランス語学は研究者の数がまだまだ少ないことに起因しています。様々な視点で言語に興味をお持ちの人たちもたくさんいらっしゃることでしょう。とくに若い方々は今までの枠にとらわれずに、新たな研究成果を積極的に投稿していただきたいと思っています。

幸いなことに昨年度は印刷にかかる経費の大幅な削減が実現しました。その節約分を生かして会誌をより多彩な内容にすべく幾つかの案を検討中ですので、『フランス語学研究』のさらなる充実のために、皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。（木内良行）

#### 5. 運営・企画担当より

二度目の運営委員を拝命した時は目の前が真っ暗に

なりましたが、1年が何とか無事に終わりました。もう1年ありますので、何卒ご協力をよろしくお願い致します。運営委員の主たる仕事は、毎月の例会とシンポジウムのオーガナイズです。これを円滑を進めるために、大小何らかの作業がほぼ毎日あります。担当第一回目の時は、最初の2週間でファックス用紙1ロールがなくなってしまって自分でも驚きましたが、当時はちょうどE-Mailが大学の人文系の研究者間に急速に普及し始めていた時期で、連絡の主体がすぐE-Mailになって、かなり楽になったという記憶があります。以前の担当者は電話連絡で全てを行っていたのかと思うと、本当に頭の下がる思いがしました。

2004年度は、5月28日に白百合女子大学でシンポジウム「ソシール研究の現在」が開催されました。今お手にされている『フランス語学研究』第39号に「シンポジウム報告」が掲載されております。その他、12月18日にはルイズ・ティノコ先生（上智大学）によるインターネット利用によるスペイン言語地図作成に関する特別発表がありました。

2005年度は、4月11日に京都大学文学部と共催で、また4月16日には本学会主催でChristiane Marchello-Nizia氏（ENS-LSH Lyon & CNRS）の講演会を開催しました。5月28日には、関西側運営委員の井元秀剛氏（大阪大学）のオーガナイズによる与格に関するシンポジウム（於立教大学）が予定されています。

国立大学が独法化され、またアメリカ中心のグローバル化が顕著になってきて、人文系の特に文学・語学系の研究の存立や、その多様性の確保を強く危惧する声が聞かれるようになってきました。しかし幸い本学会では、毎月の例会でレベルの高い研究発表が維持されています。院生や若手のみならず、中堅やベテランの会員の方々も研究発表や論文投稿に積極的であるというのも本学会の特徴です。

今後はこうした蓄積を文学はもちろん、英語学、日本語学、言語習得、心理学など隣接の研究者たちにも披露し、互いに啓発し合うような関係性を模索していくのも一つの方向性ではないでしょうか。微力ながら、このようなことにも貢献できればと考えています。

（阿部宏）

#### 6. 今後の例会予定

6月18日（土）

東京大学（駒場）10号館3階会議室 15:00-18:00

庄司麻美（東北大学大学院）「depuisの空間用法について」

治山純子（東京大学大学院）「フランス語の感情表現の概念化-恋愛に関するメタファー表現の研究-」

司会：前島和也（慶應義塾大学）

7月9日（土）

東京大学（駒場）10号館3階会議室 15:00-18:00

林迪義（愛知県立大学）「副詞*même*再考」

藤田知子（神田外語大学）「接頭辞「片-」(kata-)の意味と用法―日仏対照の観点から」

9月24日（土）

東京大学（駒場）10号館3階会議室 15:00-18:00

喜田浩平（慶應義塾大学）「*rarement*と*マレニ*の対照研究」

塩田明子（慶應義塾大学非常勤）「話し言葉の時制について」

10月30日（日）、京大会館

発表者未定

11月12日（土）

東京大学（駒場）10号館3階会議室 15:00-18:00

山根祐佳（慶應義塾大学非常勤） 題未定

1名未定

12月17日（土）

東京大学（駒場）10号館3階会議室 15:00-18:00

対照言語学に関するシンポジウム開催予定

## 7. 各地の研究会だより

### フランス言語学を一緒に勉強する会

慶應義塾大学三田キャンパス（通常は大学院棟）で月一回、土曜の15時から18時まで研究会を開いています。完成した研究というよりも、発表者の提供するテーマをどのように発展させたらよいかを参加者全員で考えることを主眼とした集まりで、毎回大変刺激的なものとなっています。論文や著書の紹介・論評なども歓迎いたします。興味のある方はどうぞご参加下さい。案内はメーリングリストFrenchlingでのみ行い、郵送による通知は行っておりません。Frenchlingに加入しておられない方は世話人のアドレスにお知らせいただければ、個人宛にメールでご案内します。今年度前期の予定は次の通りです。

5月14日 慶応大学（三田）大学院棟 347-B 教室

藤田知子（神田外語大学）「現代日本語における接頭辞「片-」(kata-)--対照研究 に向けて」

6月4日 庄司麻美（東北大学大学院修士課程）

「*Depuis*の空間用法について」

7月16日（予定） 木島愛（筑波大学大学院博士課程）

「フランス語における知覚動詞 *voir*の構文と意味について」

9月以降の日程と発表者は未定です。発表をご希望

の方は世話人までご連絡ください。

世話人：川口順二 <jnkawaアットattglobal.net>

大久保伸子 <okuboアットmx.ibaraki.ac.jp>

前島和也 <kazuyaxアットecon.keio.ac.jp>

### 関西フランス語研究会

月1回、関西大学で、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。気楽な会ですので言語学に興味のある方でしたらどなたでもいらしてください。ここ1年では次のような発表がありました。

4月例会

岸彩子「*Infinitif de narration*の擬似現場への密着性」

5月例会

川勝恵理「二次述語文としてのフランス語描写構文」

6月例会

森香奈絵「不定名詞句の意味についての一考察 - 主語位置での分布制約から - 」

7月例会

山本香理「直接目的補語を表示しないこと - 動詞 *aimer*の意味分析から - 」

11月例会

春木仁孝「単純過去と複合過去 ある小説の分析から」

12月例会

武本 雅嗣「動詞 *donner*の多義性について」

1月例会

出口優木「連想照応 - 部分・全体関係から - 」

3月例会

清水光晴「日本語の時間の意味を表す「なる」と対応するフランス語表現」

これからも、関西の方の情報交換の場としてみなさんのお役に立ちたいと思っています。研究発表だけでなく、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども大歓迎です。発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください（関西の方に限らずどなたでもどうぞ）。

平塚徹：hiratukaアットcc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲：tomonoriアットyo.rim.or.jp

## 8. フランスの若手・中堅研究者紹介（2）

昨年につづき、フランス語圏で活発な研究活動をしつづける新進気鋭の研究者を、留学中もしくは留学から帰ったばかりの会員に紹介していただきました。息長く活動を続ける大家やベテランに加え、中堅・若手の新世代が台頭するフランスの研究状況をかいま見ることができます。

**David Nicolas** (CNRS, Institut Jean-Nicod)

現在CNRSの研究者であるDavid Nicolasは、もともと理工系の出身だが、カナダ旅行中に偶然出会った認知心理学者John Macnamaraに影響を受け、McGill大学で心理学および言語習得について研究を始める。その後、実験に重きを置く心理学より理論的な言語学に一層興味を抱くようになり、フランスに戻り、1999年にEcole Polytechniqueで”La distinction massif / comptable. Aspects linguistiques et conceptuels”と題する論文によって認知科学の博士号を取得した。Nicolasがカナダ留学時代から一貫して研究し続けているテーマは、言語習得および集合名詞と可算名詞の区別であり、2002年にはLeuvenから”La distinction entre noms massifs et noms comptables”が出版されている。その他、比較・程度を表す構文やアスペクトの問題にも関心を示し、フランス語のみならず英語でも各所で論文を発表している。John LyonsとBrendan Gillon(MacGill)に感化されたというNicolasの研究手法は、豊富に採取された実例を観察し、ある言語現象を説明するもっともsimpleで明快な言語原則を導きだし、意味論の立場からそのメカニズムを解明しようとするものである。例えば(これはユニークな研究と言えるだろう)、F. Lefevreと共著で書いた”La phrase nominale existentielle et la distinction aspectuelle télique / atélique”では、”victoire en deux heures VS \*victoire pendant deux heures”, “\*travail en une minute VS travail pendant un quart d’heure”, “lecture de poème (\*en / pendant vingt minutes)” VS ”lecture d’un poème (en / #pendant cinq minutes)”などの非述定文について、名詞句の内的アスペクトによる差異や修飾語句の与える影響などを論じている。2001年以来F. Corblinと共同で研究グループSémantique et Modélisationを主催しているNicolasは、昨年の夏にはReference to Objectをテーマとした認知科学のサマースクールをRobert Casatiと共同主催するなど、積極的にリーダーシップをとって活動している。また、多趣味な人のようで、夏目漱石に村上春樹、小川洋子を好んで読むほか、黒沢明や小津安二郎、黒沢清に代表される邦画も好きで、極めつけには囲碁もするという日本びいきなところも、われわれ日本の研究者には親しみがわく。なお、<http://d.a.nicolas.free.fr/research/index.francais.html>に彼の個人サイトがあり、そこから彼の論文をいくつか読むことができる。(小田涼)

**André Thibault** (Université de Paris )

いわゆる「標準フランス語」とされるパリ方言以外にも、歴史的・地理的に数多くのフランス語が存在する。André Thibaultは、こうした様々なフランス語に特有な語彙を集めた辞書の編集に関わり、さらに辞書編集の方法論を批判的に検討することを通じて言語を

研究する。専門はフランス語の多様性研究、フランス語史、ロマンス語比較研究。

これまでTrésor de la langue française au Québec、Dictionnaire suisse romandの編集の中心となったほか、『フランス語語源辞典』Französisches Etymologisches Wörterbuchの編纂に12年にわたり関わってきた。2002年よりパリ第4大学教授に就任、この年にLettres Modernes学科に新設された講座Francophonie et variétés des françaisを担当し、その学問的誠実さと気さくな人柄で多くの学生を惹きつけている。今回この記事を書くにあたってインタビューを申し出ると快く応じてくださった。

氏はケベック出身でフランス語を母語とし、幼少時に英語を習得、またスペイン語、ポルトガル語、さらにスイスに住んだ経験からスイスドイツ語にも精通するという本物のmultilingualである。ケベックのLaval大学にてClaude Poirierのもとで言語と歴史の関係について学んだ後、スイスのLausanne大学にてSilvia Faitelson-Weiserのもとで1998年に学位を取得した。博士論文は『前古典期スペイン語における単純過去・複合過去の研究』として既出版されている(Perfecto simple y perfecto compuesto en español preclásico, 2000, editions Neimeyer, Tubingen)。

言語学研究における自分のオリジナリティを尋ねると、ある一つの言語を対象とする言語学の方法論を、他の言語を対象とする言語学の方法論と比較し、双方の議論に橋渡しをすることができる点であると答えてくださった。2004年8月からはRevue de la linguistique romaneの副編集長も務めている。今後はDictionnaire historique des gallicismes de l’espagnol(スペイン語のガリシズム、つまりフランス語からの借用表現の辞典)およびDictionnaire du français régional des Antilles françaises(アンティル諸島のフランス語辞典)の編集に関わる予定である。辞書編集は網羅性を第一とする点で言語学の他分野とは性質がいくぶん異なるが、それゆえにこそ、他分野にはできない一般言語学への貢献が可能であるという。氏は今後ますます精力的に活動を続けていこう。(松原万容)

**Catherine Schnedecker**

(Université de Strasbourg II (Marc Bloch))

ストラスブールの30kmほど南方に位置する、ブドウ畑の広がる小さな町 Barr の出身である Catherine Schnedecker は、メス大学教授を経て、2002年よりストラスブール第2大学教授として精力的な研究活動を行っている。近代文学を専攻した後、社会的な問題を抱えた地域にあるコレージュで教鞭を執っていたが、そこでの経験から勉強をしないおす必要を感じ、フランス語教授法そして言語学を学んだ。

研究の鍵概念としては chaînes de référence を挙げる  
ことができる。また問題へのアプローチの面で大きな  
影響を受けた研究者として Michel Charolles と Georges  
Kleiber の存在を指摘する。M. Charolles のもとでラ・  
フォンテーヌの『寓話』における chaînes de référence  
について論じた DEA 論文を執筆した後、G. Kleiber と  
M. Charolles の共同指導のもと 1992 年に Référence et  
discours : chaînes de référence et redénomination (Essai sur  
l'emploi en seconde mention du nom propre) と題する博  
士論文をストラスブール大学に提出。さらに 1998 年  
にはこの博士論文の加筆・修正版である Nom propre et  
chaînes de référence を Klincksieck より公刊した  
(Recherches Linguistiques 21)。

Schneedecker は Klincksieck の Recherches Linguistiques  
シリーズの数編における共同編集者としても知られて  
いるが、記憶に新しいところでは Indéfinis, définis et  
expression de la partition (Langages 191, 2003) を Anne  
Theissen と共同編集している。現在関心を寄せている  
研究テーマは、d'aucuns, les uns, quelques-uns など -uns  
を含んだ不定代名詞の共時的・通時的な研究、品質形容  
詞・限定形容詞のいずれにも分類されない「第3のタ  
イプ」の形容詞、テキストの結束構造 (cohésion)、指  
示詞などである。これらのうちのいくつかの問題は、  
本年度の Maîtrise 課程及び DEA 課程のセミナール  
Etude de cas : Les pronoms indéfinis en -un(s) : d'aucuns,  
les uns, quelques-uns / Sémantique référentielle で扱っ  
ている。

上述のセミナールに加え、「統語論」の講義 (DEA  
課程の必修科目) も担当しているが、いずれの講義に  
おいても、毎回配布する資料に盛り込んだ豊富な実  
例をもとに、明快で説得力のある解説がなされる。師  
である Kleiber 譲りと思われる冗談を交えながら行  
われる講義では、学生とのやりとりが頻繁かつ活発  
であり、学生の信望も厚い。最後に、主に D.E.U.G の  
学生を対象として学術文献の読解法を説いた著作と  
して Lire, comprendre, rédiger des textes théoriques  
(De Boeck, 2002) があることを付言する。  
(高橋克欣)

## 10. IT時代のコーパスづくり

いまや言語研究にとって不可欠となったインター  
ネットやデータベース。『フランス語学研究』にも  
毎号ではありませんが「情報ファイル」のページが  
設けられ、この分野に関する質の高い情報を紹介  
しております。ここでは、長年にわたって蓄積した  
電子データを自家版日仏語データベースとして充  
実をはかる貴重な試みのご紹介と、均質で確実  
性の高いコーパスやデータが得られるサイト案内  
をお届けします。

~~~~~

「日常的な日仏語対照データベース」を目指して
西村牧夫 (西南学院大学)

私がパソコン使用に踏み切ったのは、1989年のこと
だ。macintosh「漢字Talk6.0」のリリースにより和
仏混交のテキストがかなり大量に処理できるのでは
ないかと期待されたからだ。試行錯誤の後、何とか
使えるようになってすぐに購入したのがスキャナ
ーとOCRソフト。これがコーパス構築の第一歩だ
った。インフォマントを使わない、francophonesに
質問しない、研究書に依存しない、の三無主義に
とって不可欠な道具であった。ただし、データ入
手が簡単にできるようになった現時点で振り返
ると、私のしたことは数量的にかなり空しい行
為だったと言えるだろう。

このコーパスの一部は、形容詞を統計的に研究
している同僚の Trubert 氏の手により『Fiction』
というタイトルのもとに整理されている。それによ
ると、268 textes (essai, roman, théâtre, scénario)
de 1945 à 2002 (21,571 pages comprenant 7,525,503
mots) ということである。まあ、現代フランス語
で書かれたフィクションが多いというのが取り柄
だろうか。

私のコーパス構築の第2段階は FileMaker を使
った簡便な日仏語対照データベース作成である。一
番のネックが日本語文の入力であったが、日英会
話表現の電子辞書からのパソコンへの読み込みに
成功し大きく前進した。現在、データ数はおよそ
9万で、そのうちの3万件近くが日仏語対照デ
ータだと思われる。フランス語だけのデータとし
ては、Dictionnaire du français langue étrangère
Niveau 2 (Larousse) の文例が入っており、日
仏語対照データと合わせ、日常フランス語デー
タとしてはかなり優れたものと自負している。事
実、ここ10年間の執筆活動の大部分は、この日
仏語データベースに依存してきた。また、これは
もともと教材作成用であり、ここから毎年およ
そ600前後の和文仏訳練習問題が産み出されて
いる。

いわゆる「コーパス言語学」については、中尾
浩氏が精力的に取り組んでおられ、そのデータ
の威力はつとに f-ling 上で知られるところであ
る。したがって、私のささやかなフランス語
コーパスは、10年近くの空白を経て、今後は
「日常的な日仏語対照データ」の充実に向かう
ことになるだろう。たとえば、Niveau 2 の文
例に日本語文をつける、自作のシナリオ対訳集
あるいは日本の現代小説とそのフランス語訳を
データとして読み込む、などを考えているところ
である。日仏対照データが5万件を超えるよ
うになれば、フランス語学会への寄与も期待
できるのではないかと考えている。

~~~~~

Google France より 確実！ —— 最新学術サイト案内  
前島和也 (慶応義塾大学)

Googleをはじめとするインターネットの検索エンジンは我々言語学研究者にとっても不可欠になっている。論文や著作の検索はいうまでもなく、詳細検索で単語や表現の実例を瞬時にして目にする事ができるのはかつて手で拾ったデータを丹念にカード分類していた時代から見れば驚天動地のことに違いない(学生時代、年中行事として教授宅のカード整理に召集されたものである。口の悪い先輩は歌留多とりと呼んでいたが)

とはいえ、従来のGoogleは膨大な量のデータが検索できる反面、余計なものも拾ってしまうため、目的の情報を得るには結構な時間と労力を費やすことにもなりかねない。例えば、jean duboisを入力すると言語学とは何の関係もない一般人のホームページを含め約8000件もヒットしてしまう。これほど平凡ではないだろうと思ってhermann jacobi (Compositum und Nebensatz, 1897で知られる)を検索するとなんと約1200件もあった。キーワードを増やして絞り込める場合はいいが、それでも時間はかかる。

昨年登場したGoogle Scholar (www.scholar.google.com)は対象を学術論文と著作に限定しているため、こうした無駄が相当省けるようになった。詳細検索で著者を限定して検索することも可能で、直接論文が参照できない場合でも、引用している論文を見ることができ、公刊年の限定もできる。今後ファイル・タイプの限定など詳細検索が充実して行けばより使い勝手がよくなるに違いない。

この他、Scirus (www.scirus.com)ではさらに研究分野を限定することができる特色がある(公刊年は最大で1920年から2005年まで)。2億にのぼるウェブ・サイトから検索できるというのだからカード時代からみれば天文学的規模だが、反面、Google Scholarに較べ使い勝手は若干劣るようだ。また、フランスのサイトとしてはCNRS (Centre national de la recherche scientifique)のwww.cnrs.fr/rechercherで同研究所の出版物が検索できる。

今後同種の特色ある検索サイトが数多く登場し、それぞれ充実したものになって行くことを期待したい。

~~~~~

多分野コーパスづくりに威力

私のお気に入りサイト 大久保伸子(茨城大学)

私が日ごろ愛用している日本語とフランス語のサイトをご紹介します。網羅性には欠けませんが明確なテーマがあり、均質で信頼性が高いデータが得られること、簡単にアクセスできることを基準に選びました。

<日本語>

・青空文庫: <http://www.aozora.gr.jp>

日本語のコーパス探しで一番先に見るのは現在4000

以上の作品を収録したこのサイトです。著作権の切れた作品をボランティアが入力して電子化したものを収録し、作家別と作品別のリストが示されています。組み込まれた検索エンジン Googleを用いて、青空文庫全体あるいは作家や作品を指定して、特定の語彙や表現を検索することができます。収録されているものの大半は文学作品ですが、南方熊楠の著作やアメリカ大統領就任演説(翻訳)などもあります。著作権切れの作品であるため、現在は使用されなくなった差別表現なども多数引っかかり、googleやYahooといった最新情報が中心のサイトとはひとあじ違う言葉の局面が楽しめます。

・新聞記事

朝日新聞: <http://www.asahi.com/>

毎日新聞: <http://www.msn.co.jp/>

一番手軽なのはその日の新聞を各新聞社のサイトでネットで見ることです。しかし基本的には当日の記事しか見ることはできませんので、もっと詳しく調べたい時には大学図書館の新聞検索サービスを利用します。よく利用するのは朝日新聞のデータベース検索「聞蔵」で、これは20年前の記事から当日の記事まで検索できます。インタビュー記事などは会話コーパスに準じたものとして参考になります。

・法令データ提供システム:

<http://law.e-gov.go.jp/cgi-bin/idxsearch.cgi>

憲法から始まって様々な法令中の語彙を検索することができます。検索語彙は赤く表示された状態で、その語彙が出ている法令文を参照することができます。法律用語は特殊ではありますが、定義が画定されていて指示関係が明確ですから、探す語彙、表現によっては相当に使い道があると思います。私は今のところまだそういうテーマに出会っておりませんが、on ne sait jamais!これからの楽しみです。

<フランス語>

・ABU: la Bibliothèque Universelle

<http://abu.cnam.fr/>

フランス語版「青空文庫」とでも言うべきサイトで、作家の死後70年以上経過して著作権が切れたフランス語の作品をボランティアが入力したものを集めています。大半は文学作品ですが、DarwinやMarxなどの著作も収録されています。作家別、作品別のリストがあり、そこからある作品のテキストを丸ごとダウンロードすることができますし、調べたい項目が決まっていれば recherches de mots でABUの全作品についても、特定の作家や作品についても検索が可能です。

・GALLICA: <http://gallica.bnf.fr/>

フランスの Bibliothèque Nationaleの電子図書館のサイトで、これも ABU と同じように、作家や作品からファイルをダウンロードすることができ、また語彙検索をすることもできます。しかし ABU に比べてテキストを入手するまでの手順が複雑なので、最近はまだ使っていません。

・フランス大統領官邸のHome page:

<http://www.elysee.fr>

インタビュー、演説などをコーパスとして欲しい時に役立ちます。accès directの 選択画面から discours を選ぶと期間、テーマなどから様々な談話を書き起こした記事を選ぶことができます。本当の会話コーパスとは言えませんが、インタビューを書き起こした記事などは会話コーパスに準じたものとして参考になります。

・EUの公式サイト: <http://europa.eu.int/>

公文書はもちろんのこと、EUの様々な仕組みや活動の紹介がEUの各言語で書かれているので、たとえば英語表現と比較したりすることもできます。

・童話、伝説、童謡のサイト

LIRE ET RÉCRÉER : <http://www.lirecreer.org/index.html>

フランスを始めとして、イギリス、ドイツ、ギリシャなどの伝説や、グリム、アンデルセンなどの(仏語訳)童話を読むことができます。詩や童謡の歌詞もあり、童謡の歌詞のページではその歌のメロディーがバックに流れ、美しい挿し絵もあって眺めるだけでも楽しいサイトです。

10. フランス語学会と私

泉 邦寿(上智大学)

このたび、編集委員を辞任するにあたって何か書いてほしいとの依頼を受けたので、一委員としての感想のようなものを記すことにしたい。

現在の日本フランス語学会は共和国の歴史になぞらえて言えば、第三共和国であろう。第一共和国は仏文学会と合併して日本フランス語フランス文学会となる前のフランス語学会であって、私は単にその学会が残した会誌『フランス語研究』を多少知るのみである。語学の研究が文学との結びつきを密としていたといていい時代で、研究も理論化よりは言語事実(それも文学的なテキストを材料とした)を明るみに出すことに重きが置かれていたとの印象を受ける。ただ、あとからこの会誌を読んだ私にとっては、ライズィの*Der Wortinhalt*の紹介がなされていたのが印象的で、その後、研究社から鈴木孝夫訳で『意味と構造』(現在は講談社学術文5庫)として発刊されたこの学者にはその後私自身ずいぶんと影響を受けた。

さて、第二共和国は、両学会の合併後、言語学の急速な進展に呼応するようにしてフランス語学研究会が発足した1967年に始まるといえる。それに伴って発刊された新しい雑誌が今の『フランス語学研究』である。第1号の編集委員には、会津 洋、伊藤 英、井村順一、大橋保夫、小方厚彦、河村正夫、木下光一、佐藤房吉、田島宏、福井芳男、松原秀一、丸山圭三郎、渡瀬嘉朗といった方々の名が見える。また、私の記憶では研究会の発起人の中には朝倉季雄、川本茂雄、三宅徳嘉といった方々もおられたと思う。

私が青山学院大学で開かれた発会の研究発表会に出かけたのは、松原先生のお誘いを受けたからである。当時の欧米の言語学界は構造言語学の全盛から生成文法の発展の時代に入りつつあり、2年後にはマルティネが来日する一方、前後してヤーコブソンやチョムスキーも来るという言語学ブームが日本にも広がりつつあった時代であった。急速に変化発展しつつある言語理論に目を向け、そこからフランス語の研究にも新しい風を入れることが必要で、それには新たに研究会を発足させなくては、と多くの方が考えられたのであろう。この研究会によって初めてフランス語学関係の会に参加した新参者である私にはそうした事情はまだよく分からぬままではあったが、ある種の熱気のようなものを感じることはできた。

はじめは今のような例会はなかったが、数年たって開かれるようになった。場所は最初東京外大、それから東大駒場であった。いろいろな発表を聞くのを楽しみにして出かけたが、そのうち発表せよとのお勧めを木下先生から受けるようになり、拙い発表をするようになった。例会の後は今と同じように皆でビールを飲みながらいろいろな話をしたが、なかなか直接お目にかかる機会のなかった諸先生と親しくお話ができ、励まされ、ずいぶんと勉強になった。場所としては駒場の帰りはほとんどが渋谷だったように記憶する。

そのうち、例会の開催場所を上智にしてほしいということになってお引き受けしたが、これはかなり長い間続いたと思う。当時は編集責任、運営責任は事実上、木下先生お一人がなさっておられたが、主として事務的な部分、それに編集作業の一部のお手伝いを私がお引き受けすることになって編集委員に加えていただき、事務局と例会の会場(そして後の二次会も)のお世話をかなり長く続けることとなった。当時はフランス語を学ぶ人が割合に多いよき時代で、加えて言語の研究が多くの人々の興味を引き、人文科学のパイオニア的な役割さえ果たしていた時だったこともあって、会員の数は増加していった。さらに、会員になった若手研究者の多くがフランスに留学するようになった時代でもあった。それに伴って、フランス語学会での発表や雑

誌に掲載される論文も理論的な議論に重きが置かれる傾向が強くなっていったのである。

このような時代の変化に対応するためには、多くの若い世代の会員に編集委員となってもらわなければならないとの認識に立って木下先生が当時の編集委員会に呼びかけ、全面的に委員の交代がなされたのが1985年だったと思う。私は旧編集委員会に属した者として一人残留し、つなぎの役目を数年間果たしたのであった。これが第三共和国である。その後、(日本)フランス語学研究会の名称は再び日本フランス語学会と変わり(従って、現在は第四共和国かもしれない)、私は新たに定められた交代制にしたがって委員を辞任し、それから5年後に再び委員となって今回の辞任まで務めたのである。

現在は機関誌掲載論文のレベルも高くなり、研究発表もさかんになっているが、私のような者には少々気がかりなことないわけではない。それを記そう。

1. 面白い研究には「はっ」とさせて、「なるほど」と思わせるところが必ずある。理論の部分は後者であり、最近の研究ではさまざまな理論を踏まえ、自らの理論的な提案もなされていて目を見張ることも多いが、はっとするような言語事実に気づかせられることは少なくなっているような気がしないでもない。それも作例ではなく、実際の言語事実の中にそれを見いだすこと、あるいは現象自体はこれまで知られていても、気づかなかった角度からそれに新しい光を当てること、などはすべての出発であろう。『沈黙の春』を書いて現代的なエコロジーの先駆者となったカナダの生物学者レイチェル・カーソンに*The Sense of Wonder*という著書があるが、その感覚である。まず、言語事実自体の面白さとその観察の鋭さが出発点になくはほんとうに興味深い研究にはならないのではないだろうか。

2. 発表にしる論文にしる、これはコミュニケーションである。伝えたいことが過不足なく、正確にきちんと伝わり、聞き手ないしは読み手に理解されることがなくては意味をなさない。そうしたことにもう少し配慮した方がいいと思うケースがまま見られる。言語という、コミュニケーションでもっとも重要な現象を対象とするフランス語学の研究においては、第一にその点に重きをおいた発表・論文となつてしかるべきではないだろうか。

3. フランス語、言語研究の対象分野は実のところ広い。さまざまな事柄がとりあげられていいはずだが、現実に発表されるものを見てみると、似たようなところに集中しているように見受けられる。もちろん、先人がつけた道に対して新しい光をあてることは大事であり、興味深く、意義があるが、まったく光を当てられなかったところに踏み入ることが果敢に行われても

いいのではないだろうか。

4. 言語の研究はこれを狭い分野で綿密に研究するだけではなく、広い視野から考えることも求められるが、大きく広い立場から、学際的なことも含め、ある意味で大風呂敷を広げるような研究がたまにはあってもいいように思う。これは特にベテラン研究者に望まれるところであろうが。

5. 学会を支えている人たちには言語研究プロパーの研究者だけではなく、文学研究、語学教育の方々も多い。こうした人たちにも参加してもらい、共に考えることを可能にする、また、そうしたいという気にさせる機会を提供する必要がある。多くの会員はフランス語教育の当事者でもあるが、その問題を言語研究と関係づけて議論することは、不思議なことに言語教育畑からはこのところすっかり姿を消してしまった。たとえば、フランス語学会が積極的に取り上げてもいいのではないか。

これまでの研究者教育者としての道において、私はまことに多くのものをフランス語学会に負っている。先輩ばかりか多くの同輩、後輩の方々にも教えられ、助けられてきた。それに比較すれば、私自身が語学会に対してなし得たことは本当に小さなことでしかない。まことに感謝するばかりである。

勝手な感想ばかりを述べたが、今後とも一会員として、積極的に会の活動に参加し、自らの研究も充実させていきたいものと考えている。

11. 編集後記

ニューズレターをお引き受けして2年目です。昨年度からA3二つ折りとなりました。企画・運営担当委員や編集責任者とは異なり季節労働者的ですが、それでも取り上げるトピックが決まらなると顔から汗が流れるガマガエルの心境になります。今回もアイデアを出してくださった方々、執筆を快くお引き受けくださった方々に心からお礼申し上げます。例会、シンポジウム、学会誌、本学会ホームページをつなぐ紙媒体のニューズレターは言ってみれば「G...のおまけ」のようなものでしょう。『フランス語学研究』のおまけとして気軽にお読みいただければうれしいです。

ゴールデン・ウィークの残りがまだ一日ある五月晴れの今日、引きつづき本号のレイアウトと印刷をお引き受けくださった東郷雄二編集委員にお礼を申し上げます。(藤田知子)

News Letterのバックナンバー

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>

メーリングリストfrenchlingの加入申し込み先

f-ling-adminアットfrench.lang.osaka-u.ac.jp